

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名

いやなが保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「まねっこしよう！」 1 歳児

<テーマの設定理由>

1 歳児は遊びや生活の中で、友達のまねっこをする姿が見られる。まねることは学ぶことである。子どもたちのお互いの動きへの観察力を引き出すことをねらいとした。

2. 活動スケジュール

【4月】 テーマ決定、 問いの検討、環境デザインの検討

【7月】 探究活動の実践/ 2 回

「まねっこ」 できるような絵本やペープサート等を見る。手遊び歌を歌う。虫、果物を見る、触る。動きをまねる。

【8月】 探究活動の実践/1回

絵本や手遊びを楽しむ2歳児から刺激を受けた後、手遊びや言葉遊び、動きをまねる。

【9月】 探究活動の実践/1回

グループの友達から刺激を受けて、手遊びや言葉遊び、動きをまねる。

【10月】 まとめ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【視覚的教材】

絵本：「ぴょーん」 ポプラ社/「パンダなりきり体操」 講談社/「じゃじゃあびりびり」 偕成社

「たべものだあれ」 講談社/「くつついた」 こぐま社

手作り教材：「パンダウサギコアラ」（ペープサート）「りんごころころ」（絵カード）

【場の設定】

①視覚的教材を落ち着いて見るために椅子を配置した。

②友達同士の動きが見え、自由に動ける広さを確保した。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

当園の子どもたちは、絵本などの視覚教材をきっかけに、自由に表現することを楽しんでいる。今回の「まねっこしよう！」の活動では、1 歳児向けの絵本を読み聞かせ、「まねっこできるかな？」と声をかけると、経験を重ねるうちに、保育者や友達と一緒にその言葉や動きを「まねっこしたい」という気持ちが表れるようになった。

さらに、実際の虫や果物に触れたり観察したりする体験や、一つ上の学年である2 歳児の動きを見ることで刺激を受け、自分なりの動きを表現する芽が出てきた。子どもたちは「まねっこ」を通して、身近なものに関心を持ち、保育者や友達と一緒に表現する楽しさを味わった。

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

【活動の内容】

- ・絵本「バッタ」「ぴょーん」を読み、バッタの跳ねる動きを楽しめるように促した。
- ・実際に大きなバッタを捕まえて透明ケースに入れ、観察を行った。
- ・2歳児の言葉や動きを刺激として取り入れるため、ペープサート「パンダウサギコアラ」や絵カード「りんごころころ」、短めの絵本「じゃあじゃあびりびり」「たべものだあれ」「くっついた」を読み聞かせた。
- ・さらに、動きをイメージしやすい絵本「パンダなりきり体操」を読み聞かせ、保育者と一緒に体を動かす活動をした。

【子どもの姿】

- ・絵本に集中できず、自発的な言葉や動きは少なく、「まねっこしたくなる環境」の工夫が課題となった。
- ・ケースの中で元気に跳ねる大きなバッタを見て驚き、「キャー！」と歓声を上げながら、びよんびよん跳ねる子どもの姿が見られた。保育者と手をつないで跳ぶことを嬉しそうに何度も繰り返していた。
- ・2歳児が友達とくっつき合ったり、「じゃあじゃあ」とオノマトペを楽しんだりする様子を見て、1歳児もまねしながら一緒に笑い合う姿が見られた。
- ・ペープサートを見ることで、身ぶり手ぶりで動物を表現し、「上手だね」と声を掛けることで安心した表情になり、他児も注目する様子が見られた。
- ・絵本を繰り返し読むことで、知っている物には指差しや「んー！」と言葉にして表現するようになった。
- ・「パンダなりきり体操」では、手足をあげたりさげたりしながら、繰り返し表現することを楽しんでいた。

【保育者とのかかわり】

- ・保育者が「まねっこできるかな？」と声をかけ、一緒に体を動かすことで、子どもたちは安心して活動に参加できた。
- ・子どもの表現を受け止めて「バッタみたいに跳ねているね」「上手にくっつけたね」と言葉を添えることで、表現する楽しさを深めていった。
- ・上の学年（2歳児）の姿を紹介し、「お兄さんたち楽しそうだね」とつなげることで、1歳児グループの「まねっこしてみよう」とする意欲を引き出した。



「ぴょーん」を見る



まねっこする



絵カード・ペープサート

5. 振り返り

<振り返りによって得た保育者の気づき>

- ・1歳児グループが「まねっこ」したくなるような素材として、まず絵本を準備した。しかし、言葉を発することの難しさや月齢差のあるグループに対して、それぞれの子どもが自分なりの動きを楽しみ、探究活動へつなげられるのか、環境構成の工夫を重ねた。
- ・その中で、保育者が子どもの様子を見ながら動きを促せるペープサートや絵カード、そして普段から慣れ親しんでいる身近な短編絵本は、動きのイメージをもちやすいことがわかった。また、実際の虫の動きや、りんごが転がる様子を観察したり触ったりする体験も良いきっかけになった。
- ・さらに、日頃の2歳児の表現から刺激を受けることで、「やってみたい」という心の動きが1歳児にも広がっているのを感じた。面白い動きには「思わず体が動いてしまう」「楽しいからもっと虫の動きをよく見たい」という反応も見られた。
- ・このように、子どもが環境と出会い、関わり、安心して動きを楽しむためには、日常的にその環境があること、そして人（保育者や1歳児、2歳児）とのつながりがとても大切であることを改めて実感した。